

# 漢文大藏經の時期區分と特徵について

方廣鋗  
(上海師範大學)

## 一 漢文大藏經の時期區分およびその他

寫本期、版本期、近現代の印刷本期、デジタル化期

第一 漢文大藏經の定義：一定の基準により取捨選擇され、一定の基準による構造をもち、あわせて一定の外部標識をもつ漢文佛教典籍および關係する文獻の叢書

第二 「漢文大藏經」ということばの適用範圍

第三 漢文大藏經の變化を促成した要素

(一) 中國佛教による原因 (二) 佛教以外の原因 (三) 編纂人員による原因

(四) 體裁と製作方式による原因 (五) 裝丁形式による原因

## 二 漢文大藏經の各時期の基本的な特徵

(一) 寫本期

漢文大藏經の寫本期はおよそ六段階に分けることができる

1 育成段階 2 形成段階 3 構造が體系化した段階 4 全國で統一化した段階

5 版本と併存していた段階 6 純功德段階

寫本大藏經の基本的な特徵－唯一性

第一 行格、界欄および全體の風格の差違 第二 文字の差違

第三 經文の差違 第四 内容と構造の差違

系統と目録

(二) 版本期

版木、版本と版本學

遼大字藏

(三) 印刷本期

第一 排印本

1 鉛印（鉛活字をならべ紙型をつくる） 2 寫眞植字（フィルム出力）

第二、影印本

1 排列をかえていないもの 2 排列をかえてしまったもの

(四) デジタル化期

第一 初歩的な段階

1 スキャンした本 2 電子テキスト

第二 高度な段階

1 一般的なハイパーテキスト 2 雙方向的なハイパーテキスト

方廣鋗 FANG Guangchang ほう・こうしょう

1948年生

上海師範大學哲学系教授 博士（中國社會科學院研究生院）

主要著作 《佛教大藏經史（八～十世紀）》 《敦煌文獻分類錄校叢刊・敦煌佛教經錄

輯校》 《英國圖書館藏敦煌遺書目錄（斯6981號～斯8400號）》 ほか多數

# 『佛典漢語詞典』の構想

辛嶋靜志

(創價大學國際佛教學高等研究所、東京)

漢譯佛典を言語面から子細に研究すれば、それは漢語史、とりわけ漢語口語史の重要な資料としてのみならず、漢譯に比べ成立の遅い梵語佛典からだけでは分からぬ佛典の成立・発展の問題に手掛かりを与える貴重な資料としての面貌を示す。特に、後漢・魏晉代の漢譯佛典は、梵語寫本(いくつかの例外を除けば、古くて六、七世紀、殆どは十一世紀以降に書寫)よりも遙かに古く、大乘佛教の成立の問題を考える上でも重要な資料と考えられているが、漢語・梵語・チベット語佛典の正確な讀解に基づく本格的研究は始まったばかりである。

しかし、漢譯佛典に見える特殊なあるいは口語的な語彙・語法が漢語辭典や文法書に引かれるのは稀で、このことが漢譯佛典を正確に讀むことを困難にしている。最近、中國學の方面から漢譯佛典の語彙・語法を研究する機運が高まり、いくつかの優れた研究業績も發表されている。しかし、中國學からの研究は概して、用例を集め意味を歸納的に明らかにするか、外典(佛典以外の文獻)での類似の用法との比較に終始しており、漢譯佛典の特徴が生かされていない。すなわち、漢譯佛典は"翻譯"であり、梵語・パーリ語・チベット語などのテキスト、あるいは異なる翻譯者の手になる"異譯"との比較對照が可能であるという點である。漢譯佛典の難解な語法・語彙も梵語などのテキストあるいは異譯と比較することでその意味がより定かになったり、今まで見えなかつたものが見えてくる場合も少なくないのである。

この様な學問的趨勢を鑑みるに、中國學とインド學・佛教學の兩方の成果を踏まえた、一つ一つの初期漢譯佛典ごとの精細な語彙・語法研究さらにそれに基づく譯者別の語彙・語法研究が火急に求められていると考えられる。

筆者はこの方向の研究の手始めとして、すでに『正法華經詞典』(1998)・『妙法蓮華經詞典』(2001)を出版し、目下は、來年度の出版をめざして『道行般若經詞典』・『道行般若經校釋』を執筆している。また中國の漢語史研究者及び歐米の佛教學者と共に、安世高譯を中心とした『東漢代非大乘經典詞典及校釋』の三、四年内の出版を計畫している。このユニークな共同作業がうまく行けば、同様の方法で、さらに支婁迦讃譯、支謙譯など譯者別の詞典とテキストを出版して行こうと考えている。そして最終的にはこれらをまとめて、漢語佛典を材料にした『佛典漢語詞典』の形にまとめたいと思う。

辛嶋靜志 KARASHIMA Seishi

1957年生

創價大學國際佛教學高等研究所教授 文學博士 (北京大學)

主要著作 *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra. A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra.* 『『長阿含經』の原語の研究—音寫語分析を中心として』 *The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharma-puṇḍarīka-sūtra* 「漢譯佛典の漢語と音寫語の問題」ほか多數

# 日本の古寫經と中國佛教文獻 — 天野山金剛寺藏平安後期寫

## 『優婆塞五戒法』の成立と流傳を巡って

落合俊典

(國際佛教學大學院大學、東京)

大坂府河内長野市にある天野山金剛寺は行基(668-749)創建の傳承を有する古刹であるが、歴史的文獻によってその事實を徵することは難しく、ようやく 11 世紀になってはじめて傍證が得られる。一般的に古代中世の由緒ある大寺院に共通して存在していた一切經は、その後の戰亂・火災等で消失したものが多いが、幸いにも金剛寺は四千數百卷の經卷を現在まで傳えている。この一切經は同時代に書寫されたものではなく、過半は鎌倉中期の書寫であるが、古いものは平安中期の 11 世紀の寫經があるように時間をかけて形成された一切經である。

さて、金剛寺一切經中に貴重な寫本 — 後漢の安世高譯とされ、隋代には散逸したとされた『十二門經』 — が梶浦晋氏によって發見されて以來本格的な調査が開始(2000 年)され、今日まで繼續している。本稿ではその後發見された經典のなかの一點、『優婆塞五戒法』について報告するものである。

平成 15 年(2003)の夏の調査の結果、劉宋求那跋摩譯『優婆塞五戒威儀經』(大正藏 No.1503)と想定して書寫した金剛寺本『優婆塞五戒法』は、大正藏本と内容を異にした寫本であることが判明した。本書は奈良時代の 737 年までに日本に將來されたものの轉寫本であろう。

この、長らく失われていたと思われていた金剛寺本『優婆塞五戒法』は、羅什と弗若多羅の共譯である『十誦律』に基づいて在家から沙彌に至る者が遵う受戒規定の作法書であった。成立時期は五世紀中葉頃と考えられる。

落合俊典 OCHIAI Toshinori

1948 年生

國際佛教學大學院大學教授

主要著作 『七寺古逸經典研究叢書』全六卷 (牧田  
諦亮監・落合俊典編) 「大唐西域求法高僧傳の研  
究」 「二種の『馬鳴菩薩傳』—その成立と流傳」  
「初期譯經と毘羅三昧經」 <羽田亨稿《敦煌祕笈  
目録》簡見> ほか多數。

# 洛州無影 —『南海寄歸內法傳』中の一文に關する新考察

王邦維  
(北京大學)

唐の義淨『南海寄歸內法傳』卷三には「旋右觀時」という章があり、當時インドや南海地域では一日の中でいかに時刻を測定していたか、また中國・インドおよび南海においてそれぞれに異なる様々な事情についての記述があり、その中の一段では次のように述べている。

「贍部洲中、影多不定、隨其方處、量有參差。即如洛州無影、與餘不同。」  
(贍部洲〔インド〕では影の長さはさまざまであり、場所によって長さに差異がある。即ち洛州などでは影ができず、ほかの場所とは異なっている。)

洛州は、すなわち今日の河南省洛陽である。洛陽の地理的位置は北回歸線より北にあり、天文學的見地からいようと、一年中いかなる時も「無影」という状態が起こる可能性はない。日本の高楠順次郎博士が百年前イギリスのオックスフォードより出版された『南海寄歸內法傳』英譯本の中では、この問題に對して一つの解釋がなされているが、納得しがたいものである。十七年前、筆者が『南海寄歸內法傳』を研究していた際、これは義淨の誤りであると考えた。しかし十一年前ある偶然の機會により、古代洛州には、陰曆の夏至に「無影」という稀に見る現象が起きたこと、よって義淨のいう「洛州無影」は、實のところ根據のないことではなかったことに気づいた。そのため筆者は四年前に「『洛州無影』について」と題する論文を執筆したが、これに對しては異なる意見を出している友人もいる。本稿では、今年6月21日、つまり陰曆夏至の日に河南省登封市告成鎮でおこなった「無影」に關する実地調査の結果に基づき、文献と併せて「洛州無影」や關連する多くの問題について更なる検討を加え、それによつて義淨の記述に對してより深く掘り下げた考察をおこなう。これが正しいか否かは、なお専門の方々よりご教示賜りたい。

本稿には、「無影」の実地調査の際に撮影した寫眞數點を添付する。

王邦維 WANG Bangwei おう・ほうい

1950年生

北京大學東方學研究院教授 文學博士（北京大學）

主要著書 《南海寄歸內法傳校注》 《大唐西域求法高僧傳校注》 〈玄奘梵音“四十七言”和義淨的“四十九字”〉 〈鳩摩羅什《通韻》考疑暨敦煌寫卷S.1344號相關問題〉 “Buddhist Nikāyas through Ancient Chinese Eyes” ほか多數

# 佛教研究における漢譯佛典の有用性

榎本文雄  
(大坂大學)

佛教を研究するに際し、中國佛教を始めとした東アジア佛教の分野では、漢文佛典は一次資料となる。では、インド語文獻が一次資料となるインド佛教の研究に際して、漢譯佛典は如何なる有用性を有するのか。この點に關して考えられるものを列舉すると、以下のようになる。

1. インド語原典もチベット譯なども現存しないテキストの場合、漢譯佛典は現存する唯一の version として不可缺な資料である。
2. インド語原典が現存するテキストでも、それと異なる version を提示する場合、現存するインド語テキストよりも古い version であることが多く、漢譯佛典は貴重である。
3. インド語原典が現存し、それと同じ version の場合でも、漢譯佛典はインド語原典の内容理解に資したり、インド語原典の校訂に有用である。
4. 漢譯佛典の譯出に關する記録から、そのテキストのインドにおける成立年代の下限などの重要な情報が得られる。

本發表では、これらの諸點が孕む問題點や新たな研究の可能性について、原文を挙げつつ検討してみたい。

榎本文雄 ENOMOTO Fumio  
1954 年生  
大坂大學大學院文學研究科教授 文學博士（京都大學）

主要著作 “*Mūlasarvāstivāda*” and ‘*Sarvāstivāda*’  
“*Sanskrit Fragments from the \*Samgītanipāta of the Samyuktāgama*” *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen III* (co-author) 「初期佛教思想の生成 — 北傳阿含の成立」 「初期佛典における āśrava (漏)」 ほか多數。

# 經典の偽作と編輯 —『遺教三昧經』と『舍利弗問經』

船山徹  
(京都大學)

最初に、漢語で記された佛教經典（スートラ）を三種に分類する假説を示す。

1. 翻譯經典（漢譯）：インド語の原典から翻譯された經典
2. 疑經（中國撰述經典）：インドにはない中國固有の要素を含む、中國で作成された經典
3. 編輯經典：インド起源の諸構成要素を用いて中國で編輯された經典

このうち2の疑經と3の編輯經典の共通點と相違點を具體的に考察するために、『遺教三昧經』と『舍利弗問經』を取り上げる。前者は疑經であり、全文は殘念ながら現存しないが佚文は回収可能である。一方、後者は、インドの摩訶僧祇部（大衆部）の説を傳える純然たる翻譯經典であると從來考えられてきた。

本發表では、『遺教三昧經』が疑經であること、『舍利弗問經』は純粹な翻譯ではなく、恐らくは法顯の歸國直後の頃に、中國で何らかの編輯が加えられて成立した經典であること、ただし後者は一部に中國固有の構成要素を有する點において、インド佛教の資料として使用する際は若干注意が必要なことを指摘する。

兩經典によれば、インドには五部派が存在し、それぞれが僧衣の色を異にしたという（五部僧衣別色説）。インドの部派を五部派とすることにも問題はあるが、とりわけ奇妙なのは部派ごとに衣の色が異なっていたとされる點である。これをインドで成立した説と解釋するのは困難であり、中國で成立した説と解釋すると色々な點がうまく説明できる。一方、同説が『舍利弗問經』にも確認されることは、同經の少なくともこの部分は中國佛教固有の要素であることを示唆する。

船山徹 FUNAYAMA Tōru

1961年生

京都大學人文科學研究所助教授

主要著作 「「漢譯」と「中國撰述」の間 — 漢文佛典に特有な形態をめぐって」 「捨身の思想 — 六朝佛教史の一斷面」 「六朝時代における菩薩戒の受容過程 — 劉宋・南齊期を中心に」 “Kamalaśīla's Interpretation of 'Non-erroneous' in the Definition of Direct Perception and Related Problems” “On the Date of Vinitadeva” ほか多數

## 地婆訶羅（613-688）に關する中國史料

アントニーノ・フォルテ  
(ナポリ東洋大學)

佛典の輸入翻譯者として著名な地婆訶羅（ディヴァーカラ）は、年代論的には玄奘（664年沒）よりも後に位置し、そして、七世紀末から八世紀初の翻譯者であるインドの菩提流志（727年沒）や、コータンの實叉難陀（652-710）、義淨（635-713）などよりも前に位置する人物である。

本稿では、(a) 地婆訶羅の傳に關する今日入手しうる諸史料の概説、(b)これら諸史料が我々に與えてくれる傳記情報の要約、(c)よく知られている『佛頂尊勝陀羅尼經』の二・三の異譯を地婆訶羅に歸せしめることから派生するいくつかの問題と、同經のいわゆる佛陀波利譯に對する地婆訶羅の參與問題、を提示する。

地婆訶羅の傳を示す證據として我々が信頼をおき得る文獻資料のいくつかは、少なくとも一つの碑銘に基づいている。殘念ながら 688 年に龍門における地婆訶羅の墓用に刻されたはずの本來の墓の銘文がどんなものであったかを示す形跡はなにもなく、いかなる史料にも言及されていないのであるが、しかし、690 年から 705 年の間に刻された碑文の形跡はある。その文章を書いたのは武三思かもしれない。彼は、則天武后的甥であり、龍門で地婆訶羅の亡骸を納めた八角塔の近くに香山寺の僧院の建設を推進した人物であった。地婆訶羅に關する現存傳記情報を可能な限り正確に再構築するために、本稿では上述諸史料とその相對的價値について論ずる。

Antonino FORTE アントニーノ・フォルテ

1940 年生

ナポリ東洋大學文學部教授

主要著書 *Political Propaganda and Ideology in China at the End of the Seventh Century. The Hostage An Shigao and His Offspring. A Jewel in Indra's Net. "The Five Kings of India and the King of Kucha Who According to the Chinese Sources Went to Luoyang in 692"* ほか多數

# 『禪苑清規』にみえる唐・宋寺院の茶禮と湯禮

劉淑芬

(中央研究院、台灣)

本稿でおもに議論するのは『禪苑清規』中の茶禮と湯禮、およびこれらの儀禮と唐・宋社會生活との關連である。禪寺での禮儀作法で最も盛大な茶禮と湯禮は、冬・夏の兩節（結夏・解夏・當時・新年）になされる茶・湯會、および寺につとめる人々を任免するさいにおこなわれる「執事茶・湯會」である。本文は『禪苑清規』を主な資料とし、その他の關連する文獻とあわせて、『禪苑清規』の茶禮と湯禮を検討する。いつ茶を喫するか、いつ湯を喫するのか、また前後の儀禮の參加者、茶・湯會の準備作業、座席の配置、主賓の儀禮・對話、燒香の儀式などに關しては、いづれも明確で詳細な規定がある。

本稿でもうひとつ重點をおいて検討するのは茶・湯禮と唐・宋社會生活との關連である。寺院生活も社會生活の一部分であり、寺院中での茶禮と湯禮を研究するうえで、世俗社會において關連する儀禮をおざなりにすることはできない。事實、『禪苑清規』中の茶禮と湯禮を、世俗社會における禮儀作法と比較したならば、程度の問題はあるが、たとえば僧堂・茶榜・湯榜・座席の配置・揖禮などは、禪宗の清規が當時の役所での禮儀作法 — 特に朝堂から各州縣の役所にいたるまでの「食堂」のなかで役人が「會食」する儀禮、をもとにしていることがわかる。ここに、宋代の儒者が寺院での茶湯禮を見て、しばしば「三代の禮學すべてここにあり」と慨嘆した所以がある。

全體としていえば寺院での茶禮と湯禮が世俗社會で客をもてなす茶・湯禮の影響をある程度受けているとはいえ、燒香や説法などの宗教儀式を加え、また僧堂の中が「聖僧の龕」を中心とする儀式空間であることから、禪宗特有の茶湯禮が發展した。それは以下の三種の内容を含む。

儀禮 招待状をつくる「茶榜」と「湯榜」、座席の配置、敬禮

宗教行事 燒香、僧侶の説法

儀式空間 聖僧の龕を中心とする

したがって、唐・宋時期の禪寺での茶禮と湯禮は佛教と世俗社會の間の一種微妙な相互關係を反映していたとすることができる。

劉淑芬 LIU Shufen りゅう・しゅくふん

中央研究院歴史語言研究所研究員 歷史學博士（國立台灣大學）

主要著作 《六朝的城市與社會》 〈五至六世紀華北鄉村的佛教信仰〉 〈唐代俗人的塔葬〉 〈佛頂尊勝陀羅尼經和唐代尊勝經幢的建立 — 經幢研究之一〉 ほか多數

# 唐代の石刻資料にみる僧侶と經典——大藏經資料を中心として

シルヴィオ・ヴィータ

(イタリア國立東方學研究所)

近年、『大藏經』の歴史研究が次々と目覺ましい發展を見せており。中國や日本の研究者がその膨大なコレクションの初期段階を究明し、いわゆる寫本期の様々な側面が明らかになった。大藏經そのものの構成と成立だけでなく、それにつかわる社會風習、制度的背景などが、中國中世の佛教文化の一齣としてより明確な形で認識されるようになった。

そういう一連の研究の中では様々な資料が使われてきたが、碑文などの石刻資料もそれなりの割り合いをしめている。とはいえ、大藏經研究との關連で石刻資料の體系的な収集と判讀がおこなわれてきたとはいがたいであろう。そのような資料から補足情報を得る目的で、本發表ではいくつかのテキストを紹介しながら唐代の大藏經に、いろいろな形でスポットをあててみたい。それによって、この時代の僧侶が、どのように經典、とくに大藏經の傳流に關わってきたかを考える。

Silvio VITA シルヴィオ・ヴィータ

1954年生

イタリア東方学研究所長

主要著作 “Interpretations of Mahayana Buddhism in Meiji Japan: From Religious Polemics to Scholarly Debate” “Li Hua and Buddhism” *Buddhist Asia 1: Papers from the First Conference of Buddhist Studies Held in Naples in May 2001* (co-editor) “Printings of the Buddhist 'Canon' in Modern Japan” *The Manuscripts of Nanatsudera, a Recently Discovered Treasure-House in Downtown Nagoya*, by Ochiai Toshinori, translated and edited by Silvio Vita ほか多數

# 竺法護譯『正法華經』における翻譯の方法

## — 第三章「譬喻品」を中心として

ジャン=ノエル A. ロベール  
(フランス國立高等研究院)

辛嶋靜志氏の、特に『正法華經詞典』(1998年)として結實した竺法護譯に関する先驅的研究のおかげで、『正法華經』の内的一貫性と様式を主眼とする研究が非常に容易になった。

この早期の譯は、五世紀初頭の鳩摩羅什譯に取って代わられた時以降、ずっと惡名を被ってきた。とりわけ竺法護譯に不明瞭な點やほとんど理解不能な點があることは、『法華經』を中心とする宗教的諸學派の内で何度も取りざたされてきたのであり、それ故、鳩摩羅什がいかに多く、そして明瞭に竺法護の語彙を借用しているかはごく表面的に比較しただけでもはつきり判るにもかかわらず、竺法護譯が注釋史の傳統にほとんど何の影響の跡も残していないのは確かに故なきことではない。

私は最近、漢語で書かれたテキストであるという觀點から読みやすさに十分留意しながら、第三章「譬喻品」 — これはもちろん廣く認知された章名であって、竺法護譯では「應時〔時宜にかなつた〕品」という — を體系的にフランス語譯することを行つた。そこから得られる當面の結論をいくつか示したい。

サンスクリット語原典の寫本や口頭傳承がどうであったかという單純な問題をとび越えて、竺法護が最終的に作り上げた譯本というのは、原語に關するかなり直觀的な知識と、通讀可能な漢語文獻にしようとする配慮と、原典に關する先天的で、たぶん口承的な知識に隨順する必要性 — それは法護の直接的でしばしば間違った原典理解と對立するものであった — との間の緊張關係の產物であるように思われる。翻譯としてあまり信用できないことはさておき、驚くべきことにしばしば竺法護譯は興味深い読みを示すことがあり、それ故、全譯を試みる價値があるのである。

テキストの具體例に即してこれらの諸點を檢證したいと思う。

Jean-Noël A. ROBERT ジャン=ノエル A. ロベール  
1949年生  
フランス國立高等研究院 (EPHE: École Pratique des  
Hautes Études) 教授 文學博士 (パリ第七大學)  
主要著作 *Les doctrines de l'école japonaise Tendai au début du  
IXe siècle : Gishin et le Hokke-shū gi shū* 『心の「寺」を觀る  
— フランス人學者が語る佛教の魅力』 *Le Sūtra du Lotus*  
ほか多數

# 漢文マニ教經典と景教經典の巨視的比較

林悟殊  
(中山大學、廣州)

本稿は巨視的な角度から、20世紀に公開された漢文マニ教經典と景教經典の概況について、寫本の收藏と公刊およびその眞偽の鑑別、經文の翻譯・傳播およびその消滅・歸結を重視しつつ、先學の研究の基礎の上に、筆者個人の考察を結合し、要點を選んで紹介し、同時に兩者を相互に比較する。本論では、現存の四つのマニ教寫本は眞に信頼でき、眞偽を辨別する問題はないと考える。しかし景教の寫經は眞本以外に、なお明らかに偽物が入り亂れ、さらに二卷の考察を要する疑わしい經典がある。本稿では、兩教の寫經の眞偽を生みだした社會的、歴史的背景について考察する。このほか、本稿ではさらに現有の文獻資料に基づき、兩教の當時の中國における經典翻譯の規模と、それらの經典の宗教迫害後の運命について相應の検討を加える。

林悟殊 LIN Wushu りん・ごしゅ

1943年生

中山大學歷史系教授 博士生導師

主要著作 《古代日耳曼人》 《古代摩尼教》 《摩尼教及其東傳》 《波斯拜火與古代中國》 《唐代景教再研究》 ほか多數

# 瓦礫の山から神を掘る—唐代景教文獻と研究のイデオロギー

マックス・デーク  
(ウィーン大學、オーストリア)

人文學および文化研究は近年大きく變化している。研究者たちは（實證主義者の）客觀主義等の概念がいかに脆くはかないものを益々強く意識するようになる一方で、自らが個人的背景や自らの屬する學問的傳統およびその歴史にいかに制約されているかを益々強く自覺するようになっている。このような状況は研究の方法論のみならず、研究分野やテーマにも影響を及ぼす。その結論として我々は、自身の研究者としての立場を認識し、そしてこの状況から發生する缺點を必要に應じて是正するためには、我々の研究が過去に被り、そして現在も被り續けている諸前提條件を調べなくてはならない。

本稿では、いわゆる唐代の景教文獻について、それらのイデオロギー的・文化的な前提のいくつかを派生する諸問題とともに追跡したい。唐代景教文獻は、幾つかの點で上述の作業をするための理想的な資料根據となりうる。そこには二つの文化的流れと學問領域が關與する。二つとは、最も廣い意味での神學者と、最もニュートラルな意味でのオリエンタリストである。絶えず景教文獻を使用している、いわゆる布教學を研究する人たちと、たとえば景教文獻の眞偽問題および、ある程度その中身までをも議論してきた中國學の専門家との間には、かなり大きな溝がある。兩者の接點となるのは、日本人研究者でありキリスト教牧師であった（ピーター）佐伯好郎が行った景教文獻の英譯である。

本稿では、西安の大秦景教流行中國碑といわゆる敦煌景教寫本から幾つかの例をとりながら、いかなる形で、何故に、またどのような結果を招くものとして、同じ一つの文獻の「使用者」である二つのグループの間にコミュニケーションが成立していないかを示したい。特に注目するのは、神學者たち（ゲルハルト・ローゼンクラント、ピーター・チュウ、サムエル・モップフェット、マーティン・パマー）らを主とする専門外の者たちばかりでなく、宗教學の専門家や中國學者（ハンス=ヨアヒム・クリムカイト、タン・リー〔唐麗〕）らであるが、これらの人々は、佐伯好郎の英譯の確固たる傳統のもとに、道教、佛教ないし儒教の衣をかぶったキリスト教の概念の中國的解釋にすぎない諸文獻のうちに、キリスト教の理念と術語とを読み込もうとした。その意味で、彼らは「瓦礫の山から神を掘」ろうとした人々である。さらに私は、上述のような方法で文獻を讀むことに内在するイデオロギーの問題を論證したい。このことは、オリエンタリズムとは何かを議論する、より廣い文脈と關係する。我々のばあい重要な文脈は植民地主義的に權力の問題を議論することではない。むしろ我々にとって特に議論すべき文脈は、キリスト教に代表されるが、場合により世界のいつどこにでも見出せるような遍在する宗教的「眞理」についてであり、そのような現象は、自分たちのほうが宗教的に優れていることを西洋が過去のアジアの文化の中に見て取ることであるから、それを私は新たに「超越的オリエンタリズム」と名付ける。

Max DEEG マックス・デーク

1958 年生

ウィーン大學組織神學研究所教授 Dr. Phil. habil. (ヴュルツブルク大學)

主要著作 *Die altindische Etymologie nach dem Verständnis Yāska's und seiner Vorgänger “Laozi oder Buddha?” “Von Integration zur Legitimation—Die Aśoka-Legende (Aśokāvadāna) im buddhistischen Indien und in China” “Der religiöse ‘Synkretismus’ der chinesischen Kaiserin Wu Zetian—Versuch einer Staatsreligion” “Das Ende des Dharma und die Ankunft des Maitreya” ほか多數*

## 唐代の佛教と道教からみた外道—景教徒

榮新江  
(北京大學)

私は「歴代法寶記中の末曼尼と彌師訶」という一文中において、唐の大曆年間、劍南道の保唐宗の禪僧が、彼らの西天祖師が打ち負かした二人の外道を「末曼尼」と「彌師訶」と呼び、それはすなわちマニ教教祖と景教のイエス・キリストであったことを明らかにした(『中古中國與外來文明』北京、2001)。ティム H. バレットは BSOAS 第 66 卷 1 期 (2003) に一篇の短文を発表し、この種のマニ教や景教を外道とみなすやり方は、敦煌本『老子化胡經』にも見えることを指摘し、さらに兩者にあり得た關係や年代の問題について検討した。本文はより廣い唐代宗教史の發展の脈絡から、景教徒がどのように道教・佛教によって外道と見なされたのかを考察する。そして、景教が唐朝の都城に傳わってから、どのように『老子化胡經』中の外道に變わったのかを詳細に跡づけることにつとめたい。この種の外道のイメージはその後の佛道兩教に利用され、いくつかの文献ではテキスト中の景教徒の外道のイメージを踏襲し、いくつかの文献では當時當地の宗教鬭爭の情勢を出發點として、景教徒とマニ教徒を敵對する外道勢力とみなし、皆殺しにしなければ氣分が悪いといった風であった。テキストと歴史兩方面の分析を通じて、異なる時期の宗教文献の編纂は、文献そのものの傳承を持つばかりでなく、當時の歴史背景とも關連するものであることが分かる。佛教と道教は權威ある地位を占める正統宗教となって、景教に對して吸收から批判へと轉じる態度を採ったのである。景教徒は自らの足場が苦しいものであったために、時に自らを佛・道の中へと混同させていくものもあり、教徒の中には次第に「外道」から「正道」へと轉じたものもいた。

榮新江 RONG Xinjiang えい・しんこう

1960 年生

北京大學歷史系暨中國古代史研究中心教授 博士生  
導師 中國唐史研究會理事、副會長 中國敦煌吐魯番學會常務理事

主要著作 《歸義軍史研究》 《鳴沙集》 《中古中國與外來文明》 《敦煌學十八講》 《敦煌學新論》 ほか多數。

# 『歸眞總義』—中央アジアにおけるその源流

濱田正美  
(神戸大學)

明末崇禎年間に、アーシク ‘Āshiq と名乗るひとりのインド人が南京に姿を現した。若干の中中國人ムスリムが彼に師事したが、そのうちのひとり蘇州出身の張中なる人物は、師の講義を筆録し、鼎革の後になってこれを公刊した。これが『歸眞總義』と略稱される書物であり、明末から清代にかけて出現した數多くの漢文で著されたイスラーム文獻のうち、最初期に屬するもののひとつである。書名に採られている「歸眞總義」とは、アラビア語のイーマーン・ムジュマル *īmān mujmal* の漢譯に他ならない。イーマーン・ムジュマルはイーマーン・ムファッサル *īmān mufaṣṣal* と對になるイスラームの信條であって、一般にはシャハーダそのものを指すとされているが、この書物に見えるそれはシャハーダとは異なり、「私はその名と屬性によつて（示されている）通りに神を信じる。そして私はその命令の全てを受け入れる」というものである。本書は漢字轉寫によるアラビア語本文、その漢譯、アーシクによる注、張中の疏から構成され、注と疏においては、イブン・アラビ一流のいわゆる存在一性論が、ペルシア語文獻からの引用を交えて解説されているが、禪佛教や新儒學から借用された用語が散見する。現在の中中國イスラーム教の用語では、イーマーン・ムジュマルを「總信」、イーマーン・ムファッサルを「分信」と譯し、後者はいわゆる「六信」と同義とするが、奇妙なことに張中自身や康熙時代の劉智はこれを「七信」と數え、現在も一部ではこの數え方が踏襲されている。シャハーダとは異なる信條をイーマーン・ムジュマルと稱し、「六信」に代えて「七信」を數えることは、中國のイスラーム教特有の現象ではなく、その源流は 14 世紀以降の中央アジアで編纂され、現在も廣く流布している教理解説書『チャハール・キターブ Chahār Kitāb』に求めることができる。

濱田正美 HAMADA Masami

1946 年生

神戸大學大學院文學研究科教授

主要著作 「歸眞總義初探」 “L’inscription de Xiate (Shata)” “Jihâd, hijra et « devoir du sel » dans l’histoire du Turkestan oriental” “Introduction (au numéro spécial : Saints et héros sur la Route de la Soie)” “Le mausolée et le culte de Satuq Boghrâ Khân à Artush” ほか多數

## 淨明道の祖師許遜にまつわる物語の再検討

ジュディス・マギー・ボルツ  
(ワシントン大學、シアトル)

ブリティッシュ・コロンビア大學人類學博物館（カナダ・バンクーバー）に所蔵される一冊の畫集を私がはじめて知ったのは二十年ほど前のことである。『眞僊事蹟』と題されたこの畫集は、五十八點の一連の插畫とそれにつけられた文章によって許遜（239-374）の物語を傳えている。冒頭の插畫には蘇州の畫家謝時臣（1487-1567+）の署名と印があり、これには嘉靖25（1546）年の日付がある。

『眞僊事蹟』の後記には同じく1546年の日付があり、王拱樁という人物の名で記されているが、それによるとこの畫集は嘉靖帝に獻呈されるはずだったという。しかし嘉靖帝がかつてこの畫集を所有した證據は全くない。またこの畫集を謝時臣に歸するのが妥當かどうか、疑問の餘地がある。とはいえたゞきの傳説が當時なお生き續けていたことの證として『眞僊事蹟』の價値は看過さるべきではない。『眞僊事蹟』を道教經典に含まれる數多くの聖人傳と照らし合わせることによって、許遜その人について、さらに彼が淨明道の開祖たることについて、綿密な検證が可能になるのである。

私は長年にわたり、折に觸れてこれらの文獻の校訂に取り組んできたが、有り難いことにこのシンポジウムに參加する機會を與えられ、この問題をあらためて取り上げることになった。本報告ではとりわけ『眞僊事蹟』とこれに相似た1445年版刻の道教經典『許太史眞君圖傳』との間に、いかなる符合と齟齬が見られるかに焦點を合わせる。これによって、注目に値するこの畫集が、正統的な傳承からの引き寫しであることがはっきりすると同時に、まぎれもなくその時代の所産であることも判明するのである。

Judith Magee BOLTZ ジュディス・マギー・ボルツ

ワシントン大學 (University of Washington, Seattle)

アジア言語文化學部 Affiliate Associate Professor.

Ph.D. (カリフォルニア大學バークレー校)

主要著作 *A Survey of Taoist Literature, Tenth to Seventeenth Centuries* “Notes on Modern Editions of the Taoist Canon” “Singing to the Spirits of the Dead: A Daoist Ritual of Salvation” “Not by the Seal of Office Alone: New Weapons in Battles with the Supernatural” ほか多數

## 儀禮の解明 — 齋に對する陸修靜の影響

Franciscus VERELLEN  
(フランス國立極東學院)

道教の歴史に對する陸修靜（406-477）の貢獻は、とりわけ以下の三つの點について長らく認められてきた。すなわち、天師道教團の改革、最初の道教經典の編纂、そして當時成ったばかりの靈寶經（400年ごろ）とそれが傳える佛教の影響を受けた新たな祭式の獎勵である。陸修靜は初期天師道教團の斷固たる擁護者であるかに見えるが、同時代の宗教的實踐についての彼の見解には、上清經や靈寶經からの道教の新たな啓示ばかりでなく、大乘佛教の信仰や儀禮に對する中國人の強い興味も取り込まれている。陸修靜の宗教上の信條や人柄を鮮やかに知ることはできるのは、五世紀の南中國で弟子たちや道教教團に授けられた彼の教えが記録されているおかげである。とりわけ陸修靜の講義説法は、齋の儀禮の執行に先行する彼の個人的見解を如實に傳える。本稿では、現存する陸修靜の著作の梗概を示しつつ、齋の目的と意味、その執行の規則、そしてその實踐者に要求される心構えについての彼の教説に焦點を合わせる。

Franciscus VERELLEN フランシスクス・ヴェレレン

1952年生

フランス 極 東 學 院 ( EFEO: École Française d'Extrême-Orient) 院長 Ph.D., Habilitation (パリ大學)

主要著作 *Du Guangting (850-933): taoïste de cour à la fin de la Chine médiévale* “The Twenty-four Dioceses and Zhang Daoling: spatio-liturgical organization in early Heavenly Master Taoism” “The Heavenly Master liturgical agenda: The Petition Almanac of Chisong zi” *The Taoist Canon: A Historical Companion to the Daozang* (Co-editor) ほか多數

## 清代における金蓋山龍門派の設立と『金華宗旨』

モニカ・エスピジト

(京都大學)

『金華宗旨』は著名な内丹書で、その存在は 1929 年にリチャード・ウィルヘルムの翻譯を通じて西洋に知られることとなった。この翻譯は、*Das Geheimnis der Goldenen Blüte: ein chinesisches Lebensbuch* というタイトルで出版され、カール・ユングの解説が寄せられている。ウィルヘルムが底本として使用したのは 1921 年から 1927 年にかけて出版された湛然慧眞子版で、これは、その序文に説明されているように、書店と古物商がひしめく北京の琉璃廠で発見されたのであった。實際、『金華宗旨』には数多くの版本が現存している。そして、それら全てが、神仙・呂洞賓に歸せられているのだ。こうした版本の成立は、總じて清代(1644-1912)にまで遡ることができ、道教の様々な支派や傳統に属している。

私の知る限り、『金華宗旨』には少なくとも七種の異本が存在し、その中でも稀観なものが京都の大谷大学圖書館に所蔵されている。扶乩によって啓示されたこのテキストは、多くの道教支派や傳統に用いられていた。『金華宗旨』には、原本の再構成に關わった道教の支派や傳統それぞれの特徴が殘されている。(例えば『金華宗旨』には様々な乩壇の構成員の手による序がつけられており、彼らがどのようにしてこのテキストを授かり、どのように校正したかが語られている。) 様々な版本の序、注、そして十三章からなる内容を比較してみると、それぞれの異同や遺漏が明らかになる。清代に公開乩壇を擔っていた、道教の重要な一派である龍門派は、彼らの煉丹思想の基礎としてこのテキストを使用していたのみならず、その教徒たちに傳戒を行う靈的な根據ともしていた。なぜなら、このテキストは龍門派が護持する正純な教義を象徴するとともに、このテキストの所持のお陰で正純な傳戒を續けていくことができる、と考えられていたからである。彼ら自身が原本の所有者であると立證するために、また正當な流傳を受持した者であるという美德によって、金蓋山龍門派の師たちは獨自の基準に則って『金華宗旨』を修正、校正した。

『金華宗旨』の版本を分析し、また正當性を主張する龍門派の原典上の異同を研究することで、清代道教と、こうした書物の正純な受持者であることを主張する様々な道教支派の奮闘に、光を當てることができるだろう。

Monica ESPOSITO モニカ・エスピジト

京都大學人文科學研究所助教授 Ph.D. (パリ第七大學)

主要著作 *L'alchimia del soffio. "Longmen Taoism in Qing China: Doctrinal Ideal and Local Reality" "The Longmen School and its Controversial History during the Qing Dynasty" "Daoism of the Qing (1644-1911)"* ほか多數

# 天書雲篆—道教の符圖文獻とその分析

李遠國  
(四川社會科學院)

符圖とは道教の符籙と靈圖を指す。しばしば呪術と併用され、道教の「道を廣め、世を救う」主要な手段となる。道教の加持祈禱の儀式において、あるいは修練養生の際ににおいて、隨時隨處にみな符圖の使用が認められる。現在、『正統道藏』、『萬曆續道藏』、『道藏輯要』、『藏外道書』等の叢書には計 2783 種の道教文獻が收録されるが、そのうち符圖にかかわる著作は約 700 餘種あり、卷數は一千卷にも達する。符籙や靈圖なくして道は成らず、符圖は道教の最も明確な一種の文化標識といえるだろう。

漢から唐の時期にかけての天師道・上清派・靈寶派・三皇派から宋元時代の神霄派・清微派・北帝派・淨明派・閻山派に至るまで、いずれもみな符圖の效用を非常に重視した。またそれぞれに傳承があり、きわめて豊富な文獻資料を遺した。

符圖の種類について言えば、およそ三種類に分けることができる。すなわち、星座・流れゆく薄雲・雷鳴や稻妻・風雨のような符圖は、天文・氣象・生態等と關係しており、これらを「天象符」と呼ぶ。環境や建築・家屋の領域に廣汎に活用される符圖は「地理符」である。さまざまな種類の内鍊符・修真符・治病符・驅邪符は、いずれも人々の生命活動や身體の健康とかかわりのある符圖なので、「人體符」に含めることができる。

符圖の構成には、粗放から精緻へという發展過程がある。早期の符圖にはあきらかに規範と條理が缺乏しているうえ、さらに理論的には血が通わず無力なこともあって、「學」とはみなしがたい。しかし宋元以降は、抜本的な變化が生じ、中國哲學の元氣論および儒・佛・道三教の生命學を採用して理論の基礎となし、符圖の致命的な内傷を修繕した。それと同時に、符圖に内在する構成の規範化・序列化・條理化を非常に重視し、かくして昇華したそれをひとつの學説とした。それが「符圖學」にほかならない。

李遠國 LI Yuanguo り・えんこく

1950 年生

四川省社會科學院哲學研究所副所長、研究員、教授

主要著作 《道教氣功養生學》 《中國道教氣功養生大全》 《神霄雷法：道教神霄派沿革與思想》 ほか多數

## 靈寶の「天文」信仰と古靈寶經の教義の展開

### —敦煌本『太上洞玄靈寶眞文度人本行妙經』を中心として

王承文

(中山大學、廣州)

東晉から南北朝にかけて相次いで世に出た各種の道教の經典のなかで、古靈寶經は、各派の經典の教義の整合性をとくに重視し、中古の道教が統一性を備えた經典教義の體系を構築するにあたって、もっとも深い影響を及ぼした。敦煌本『太上洞玄靈寶眞文度人本行妙經』は、明代の『正統道藏』には收録されていない古靈寶經の殘卷である。この靈寶經典は、中古道教の重要な神である太上大道君・五老上帝等の徳行功業の因縁話と靈寶の「天文」信仰を結合して、漢・晉以來、わが國の宗教の神學の傳統に全く新しい解釋を展開した。

本稿では、そのうち太上大道君自體は、早期の上清派の經典である『上清高聖太上大道君洞真金元八景玉籙』に由來することを論證する。しかし、古靈寶經は、すでにこの上清派のもっとも重要な神格から新たに原始天尊の下で靈寶の教法を専ら推し進める神像を創り上げていたのであり、その身の上話、經歷は、最初から最後まで靈寶の「天文」と繋がりあっていた。太上老君は早期の天師道の最高神とされていたが、同様に改造されて靈寶の教法を講説する神となった。元始天尊・太上大道君・太上老君は中古の道教の神々の體系の中でもっとも代表的な神とされるが、靈寶の天文の信仰と教義が順序をつけて一緒に並べたものなのである。この思想は、唐代における道教の統一された經典教義體系の重要な組織構成部分たる「三清神」の出現にも直接的な影響を與えた。しかるに南朝の上清派は元始天尊の唯一最高の地位を承認はしたけれども、依然として太上大道君を上清經の神靈とする傳統を擁護する努力を續けた。南北朝から唐宋までの道教典籍の中にあっては、二人の太上大道君が同時に並び立つ奇妙奇天烈な現象が出現する。このため、本稿では、一つの重要な方面から、靈寶の「天文」信仰が古靈寶經の教義の體系の中の核心的な位置を占め、同時に中古の道教史研究の鍵となる神が「體系化」と「秩序化」に向つて進んでいく過程をも反映していることを證明する。

王承文 WANG Chengwen おう・しょうぶん

1962年生

中山大學歴史系教授 歴史學博士（中山大學）

主要著作 《敦煌古靈寶經與晉唐道教》 〈敦煌本《太極左仙公請問經》考論〉 〈《隋書·經籍志·道經序》與道教教主元始天尊的確立〉 ほか多數

## 道教類書と教理體系

麥谷邦夫  
(京都大學)

中國における類書の歴史は、先秦時代の『呂氏春秋』や前漢の『淮南子』にまで遡ることが可能である。しかし、『皇覽』をはじめとする本格的類書が編纂されるのは、魏晉南北朝、とりわけ五世紀以降のことである。この時代は、學術・文化のうえでは佛教の流入定着と道教の成立という大きなできごとがあった。あらゆる書物からの網羅的抄録を分類整理して、厖大な知識を簡便に提供することを目的とした類書の内容にも、このような學術・文化の新しい潮流が反映されることになる。類書の性格がこのようなものである以上、その構成には當然のことながら編纂者の世界觀が反映されることになる。とりわけ、佛教なり道教なりに特化した類書であれば、その教理體系への理解が明確な形で類書の構成に反映されていると考えられる。

佛教に特化した最初の類書が編纂されるのは、南朝梁の武帝の時代であった。彼は『華林遍略』の編纂を命ずるとともに、『衆經要抄』次いで現存する最古の佛教類書である『經律異相』の編纂を命じた。こうした佛教類書の編纂には、經典の結集と目録の編纂という前提條件が必須であったと考えられている。

一方、ほぼ時を同じくして、北朝においても周の武帝の命によって、最初の道教類書ともいべき『無上祕要』が編纂された。佛教類書の編纂同様、『無上祕要』の編纂に先立っては、道典の結集と目録の編纂とが前提條件となっていたと考えられる。北周では通道觀という國立の宗教研究所に相當するものが設置されてその役割を擔ったと考えられるが、その活動の實態はかならずしも明かではない。本論では、『無上祕要』や隋唐時代の道教類書の分析を通じて、そこに反映された道教教理體系の特徴や類書という形態の持つ役割を検討する。

麥谷邦夫 MUGITANI Kunio

1948 年生

京都大學人文科學研究所教授

主要著作 『周氏冥通記研究（譯注篇）』 「穀食忌避の思想—辟穀の傳統をめぐつて」〈南北朝隋初唐道教教義學管窺—以《道教義樞》爲線索〉 『大洞真經三十九章』をめぐって」 「陶弘景の醫藥學と道教」 ほか多數

# 寶卷と明清の民間信仰－目連傳承を中心として

小南一郎  
(京都大學)

中國撰述の佛典と推測される『佛說盂蘭盆經』に起源する、中國における目連傳承は、佛教傳説という範囲を越えて獨自に展開をし、敦煌で發見された文書の一つ、『大目乾連冥間救母變文』に、ひとまずの結實をした。慳貪の心の深い目連の母親は、その報いとして餓鬼道に墜ちるというのが元來の筋書きであったはずであるが、『目連變文』においては、目連の母親は阿鼻地獄に墜ちたとされ、その母親を求めて地獄を遍歴する目連の姿が、語り物文藝の形式で、詳細に描寫されているのである。

目連傳説は、敦煌における文藝の中で、一定の完成を見せたあと、それまでとは異なった文藝の基調でもって、新しい方向へと展開をし、現在にまでつながっている。宋代にも目連をめぐる傳承文藝が盛んに行なわれていただろうことは、『東京夢華錄』などの、當時の都市の繁盛記を通してうかがうことができる。ただ、具體的にいかなる筋書きのものであったのかを知ることができる資料はほとんど遺つてはいない。そうした資料や實際の作品が遺るのは、元代以降、とくに明清時期になってからなのである。目連傳承は、元來から死者救濟の儀禮と密接に關連しつつ展開して來たと考えられるが、その傳承と死者との關係は、むしろ明清時期になった方が、よりあからさまに示されるようになる。

この時期において、目連傳承を文藝化し、作品として定着させる枠組みとなったのは、演劇と語り物文藝とであった。演劇としては、明の鄭之珍『目連救母勸善戲文』が代表的な作品であって、それ以後の目連をめぐる傳承は、多かれ少なかれ、みな、この作品の影響を被っていると言ってよいであろう。一方、語り物文藝としては、いく種類かの目連寶卷が遺されている。寶卷文藝は、敦煌の變文のあとを受けた、佛教的な語り物文藝だと位置づけられているが、兩者の間には、相當に異なる要素があることも無視してはならないであろう。こうした質的な相違の中に、中國近世社會の特徵的な構造が反映されているの考えられるのである。

小南一郎 KOMINAMI Ichirō

1942年生

京都大學人文科學研究所教授 文學博士（京都大學）

主要著作 『楚辭とその注釋者たち』 『西王母と

七夕傳承』 『中國の神話と物語り』 「「孟蘭盆經」

から「目連變文」へ—講經と語り物文藝の間』 『中

國の禮制と禮學』（編著）ほか多數

# デジタル化した古籍校勘版本の處理技術

## —CBETA 大正藏電子佛典を例として

釋惠敏

(國立台北藝術大學、台灣)

我國の漢譯佛典は、後漢に始まり元代に至る。前秦の道安から隋唐時代に至るまで、佛典を蒐集・分類して目録を編纂し、それらを「一切衆藏經典」「一切經藏」「大藏經」と總稱したが、流通はすべて書寫に依存した。宋の開寶四年（971）にいたり「開寶藏」と呼ばれる刻印（木版印刷）版本が始まり、日本・契丹・西夏・高麗の諸國や國內各地に頒布した。この後、契丹藏（丹本）・金藏（趙城本）・萬壽藏・毘盧藏・圓覺藏・資福藏・磧砂藏等の宋朝版本および韓國の高麗藏がつくられた。元代には普寧藏・弘法藏等が、明代には南藏・北藏等が、清代には龍藏が刊行された。

中華電子佛典協會（CBETA）は、現在ひろく學界で使用されているところの、日本の大正時代（1924～1934）に編輯・出版が始まった藏經（略稱『大正藏』）を底本とし、デジタル化の作業を進めている。『大正藏』は高麗本を底本とし、宋・元・明の三本を對校し、別に正倉院藏經、敦煌古本およびパーリ語・サンスクリット語經典を參照し、あわせて校勘欄の中で各版本の用字の異同等の情報を記録している。CBETAは電子佛典を製作する過程でこの校勘情報を XML で記録し、あわせて HTML 方式で表示し、校勘情報から部分的に版本を復元し、利用者が、異なる版本を選択して拾い読みできるようにした。この作業の過程とその表示方法は、あるいはデジタル化した古籍校勘版本の處理技術の参考となるかもしれない。

釋惠敏 SHI Huimin しゃく・えびん

1954年生

國立臺北藝術大學教授 法鼓山中華佛學研究所副所長 中華電子佛典協會主任委員 文學博士（東京大學）

主要著作 《中觀與瑜伽》 『「聲聞地」における所縁の研究』 “A Study on Creation and Application of Electronic Chinese Buddhist Texts: With the Version Comparison and the Commentaries of Yogacarabhumi as a Case Study” 〈虛雲和尚長時住定經驗之探索〉  
ほか多數

# 大規模佛教文獻群に對する確率統計的分析の試み

師茂樹  
(花園大學、京都)

文獻研究には、何らかの假説が必要である。例えば、ある研究者が無數にある文獻の中からどれかを選び出し読み始めるとき、その選擇の背景には文獻に對する知識や先行研究、研究者の關心などに基づいた何らかの假説が形成されているはずである。電子テキストに對する検索もまた、テキストの内容や表現をあらかじめ知つていなければ、有意な結果が出にくいくらいが多い。

近年、佛教文獻をはじめとする漢字文獻の電子化が急速に進み、研究環境は大幅に進歩したように思われる。しかし、研究者の知識の範圍を大きく超える大規模な文獻群を扱うことができる現在の環境においては、假説を前提とする從來の方法が通用しなくなっている。大規模な電子文獻群を扱うためのmethod論の検討が、大きな課題となっている。

情報科學の分野では、大規模なデータベースの中から、確率・統計やパターンマッチなどの技術によってパターンを發見し、發想や假説生成を支援する技術であるデータマイニングが注目されている。古典テキストの計量的な分析はこれまでに行われてきたが、文獻學者の假説形成のために用いられるることはほとんどされてこなかった。

本發表では、大規模な佛教文獻データベースに對して、確率・統計的手法による分類を通じて、文獻研究につながるような假説の形成を試みることで、大規模電子文獻を扱うためのmethod論について考えてみたい。その際、具體的には玄奘譯とされるすべての漢譯佛典を對象とし、コンピュータによる分類と從來の文獻學的研究の比較を行いたい。

師茂樹 MORO Shigeki

1972 年生

花園大學文學部講師

主要著作 「データベースがもたらすもの—データベースがもたらすもの」 「思想史としての文字情報処理 問題提起として」 「清辨比量の東アジアにおける受容」 ほか多數

# 唐代ナリッジベースから見た禪宗

クリスティアン・ウィッテルン  
(京都大學)

「唐代研究ナリッジベース」を構築するための準備作業が人文科學研究所において始まった。この計畫は唐代研究に關するあらゆる情報を總合的なデータベースにまとめるための技術と基礎データを用意することを目的とする。まだ開始して日も浅いため成果を十分な形で發表することはできないが、早期の段階で専門分野における問題意識とその對應を検討し、研究者の意見を取り入れることが重要と思われる。

現段階では中國の正史文獻がナリッジベースの主な柱の一つである。そこに描かれる禪宗のイメージと、禪宗文獻から得られる自己像とはかなり異なるという第一印象は誰しも抱くであろう。しかし一方で、兩者の記述する出來事は共通の文化的状況のうちに發生したのであるから、そこには何らかの種類の重なり合いがある筈である。

本稿では、唐代ナリッジベースがこうした問題に對應可能かどうか、そしてそのためにはどのような内部構造が必要となるかを検討してみたい。當然ながら絶對的な解答はないが、實驗的にどんな方向に進めばよいかということを目指してみたい。

Christian WITTERN クリストイアン・ウィッテルン

1962 年生

京都大學人文科學研究所助教授 Ph.D. (ゲッティンゲン  
大學)

主要著作 “Introduction to KanjiBase. A Practical Approach to the Encoding of Variant and Rare Characters in Premodern Chinese Texts” *Das ‘Yulu’ des Chan-Buddhismus. Die Entwicklung vom 8.-11. Jahrhundert am Beispiel des 28. Kapitels des Jingde chuangenglu “Buddhist Studies in the Digital Age”* ほか多數

# 雲居寺の碑文 — CD-ROM のための準備作業

マティアス・アーノルド  
(ハイデルベルク大学、ドイツ)

房山の雲居寺は五世紀以上にわたって、佛教經典を刻んだ 15,000 以上の石碑を産み出してきた。特別な出来事を記念するために、幾つもの碑文が記されてきたのである。それらのうち、616 年から 1999 年にかけて書かれた 28 の碑文が分析され、翻字され、翻譯されている。

これらの資料へのより容易なアクセスを提供するために、テキストの CD-ROM 化が必要であるが、その概念とデザインの両面において、いくつかの問題が生じる。それらのうち最も重要なのは以下の三點である。

第一に、テキストはいくつかの異なった形で提示されねばならないということ。すなわち、利用者は活字に起こしたものと拓本原姿とを対照させたり、注釋を施した中國語文と英語譯とを対應させたりしながら読むことができるようすべきである。碑文の一部を拡大して見たり、逆に全體像を表示させたりすることが必要な場合もあるだろう。別のウインドウに表示されたテキストも、必要とあれば、この動きや拡大縮小に聯動できなければならない。

第二に、テキストの解讀についてはこれまで多くの研究がなされてきている。いくつかの碑文は断片的にのみ残っていたり、浸食によってダメージをうけていたりするため、異なる読みや解釋が存在する。それゆえ CD-ROM はこれらのヴァリアントを提示する手段を提供せねばならない。

第三に、碑文は、佛典を石に刻むという巨大プロジェクトに関する様々な情報をもたらしてくれる。たとえば、他のいかなる資料にも見られないような多くの人物がそこに言及されているのである。このため、CD-ROM は全文検索を提供するのみならず、特殊なインデックスや關聯情報をも提供しなければならない。

本論文においては、ユーザー・インターフェースの紹介とともに、上述の三つの複合的問題點に対する解決策が論じられる。それはまた CD-ROM 開發の現段階を紹介し、この進行中のプロジェクトに関する初期の知見を提示することにもなろう。

Matthias ARNOLD マティアス・アーノルド  
1967 年生  
ハイデルベルク大学ヨーロッパ中國電子資料センター  
ChinaResource.org 研究員  
“Treasures for King Zhao Mo. The Tomb of the Nan Yue Kingdom’. A case study on the implementation of multimedia-elements in art-historical projects” “Datenbanken: Typen, Funktionalität und Perspektive der Nutzbarmachung” “Modern China Databases, Premodern China Databases” ほか多數

## 道教研究におけるデジタル資源

ファブリツィオ・プレガディオ  
(スタンフォード大學、カリフォルニア)

佛教研究に比べ、道教研究のためのデジタル資料は現段階ではほとんど存在しないといつてよい。利用できるものは二、三のウェブサイトによって提供されている限られた資料にすぎない。たとえば、これらに含まれているものに、(部分的に英語譯された)中國の百科事典、『道教大辭典』の英語版やいくつかの電子テキストがあるが、その質や信頼性はまちまちである。このような状況はしかしながら、中央研究院の李豐楙教授の指導のもと、道藏全體をデジタル化するプロジェクトが數年以内に完了した曉には、變化するはずである。

より小規模な進行中のプロジェクトとしては、私がしばらくの間攜わってきた、道教テキストについての書誌情報や圖像情報を包含するデータベースがある(今回の會議でこれらのデータベースのサブセットをPDFファイルの形で配布する豫定である)。このデータベースは限定的ではあるものの、文獻資料に関する異なった性質のデータの收集とアクセスの容易さという點において、デジタル資料がもたらす潜在的 possibility を示す一例である。このデータベースは、オンラインで利用可能な資料・概要・百科事典の項目などを簡単に收めることができるのである。

しかしながら、この領域における眞の進歩は、一次資料の信頼しうる電子版が利用可能となったときにはじめて達成される。道藏文獻以外にも、内丹のような特定の傳統や、聖人傳のような特定の文學ジャンルを専門とする道教研究者にとって重要な資料は數多い。何人かの同學たちとの準備的な議論に基づいて、私は道藏に收められていない主要道教文獻の電子版製作の構想を提案する。佛教テキストのCBETA アーカイブは、有益なモデルを提供してくれるが、そのモデルにならってフォーマットされたひとつの「藏外」道教文獻を提示したい。

私はさらに、電子テキストによって可能となる新たな多角的ツールの一例として、内丹に関する専門用語に焦點をあてた語彙データベースを紹介したい。このデータベースは、現在約2,500のレコードを持ち、それぞれのレコードは一次文獻からの關連する文章の引用を含んでいる。このデータベースは個々の見出し項目を翻譯し、注釋を施し、それらを選択して辭書の形式で出力することを可能にするものである。

Fabrizio PREGADIO ファブリツィオ・プレガディオ  
1957年生  
スタンフォード大學宗教學部 Acting Associate Professor.  
Ph.D. (ナポリ東洋大學)  
*Great Clarity: Daoism and Alchemy in Early Medieval China* “The Notion of ‘Form’ and the Ways of Liberation in Daoism” *The Encyclopedia of Taoism* (editor) ほか多數